

研究ノート

埋甕の用途・機能をめぐる素描

－研究史を振り返って－

桜井 秀雄

-
- | | |
|-------------------------|----------------------|
| I はじめに | IV 胎盤収納説・小児埋葬容器説への疑問 |
| II 「埋甕」とは何か－呼称について－ | V 境界祭祀具説の魅力 |
| III 埋甕の用途・機能をめぐる諸説 | VI おわりに |
| (1) 貯蔵容器説 (2) 小児埋葬容器説 | |
| (3) 胎盤収納容器説 (4) 建築供犠容器説 | |
| (5) 信仰関連施設説 (6) 境界祭祀具説 | |
-

I はじめに

私は平成4年度から7年度までの4年間、小諸市の郷土遺跡の発掘調査を担当し、現在報告書刊行に向けての整理作業を進めている。郷土遺跡は縄文時代中期の大集落遺跡であり、当該期の住居跡は100軒を超えている。そしてこの郷土遺跡において私は数多くの埋甕を掘り出してきた。埋甕を見つけた時の興奮は何ともいえないものがあり、ことに埋甕を取り上げる瞬間というのは、発掘調査の醍醐味を味わせてくれるものである。そんな埋甕を掘り出す度に私の脳裏に浮かんできたのは、この埋甕というものは「いったい何のために埋められたものなのか」ということであった。つまり埋甕の用途・機能をめぐる問題である。そこで研究史をひもといてみると、①貯蔵容器説・②小児埋葬容器説・③胎盤収納容器説・④建築供犠容器説・⑤信仰関連施設説・⑥境界祭祀具説、といった説が唱えられてきたことが理解できた。その中でも、現段階では小児埋葬容器説及び胎盤収納容器説が有力であるようである。しかしながら、私には小児埋葬容器説や胎盤収納容器では埋甕のもつ考古学的事象をうまく説明できないのではないかと思えるのである。そこで今回は、今日までの研究史を振り返り、そして諸説を検討することによって埋甕の用途・機能に関しての私見を提示してみたいと思う（註1）。

II 「埋甕」とは何か－呼称について－

本論へはいる前に「埋甕」という用語について定義しておきたい。「埋甕」という用語は、木下忠によれば昭和7年に刊行された千葉県姥山貝塚の発掘報告書で用いられているのが最も早い例に属するようであるが〔木下 1973〕、「埋甕」という語が広く用いられ始めるのは、宮坂英式が、昭和25年に発表した「八ヶ岳西山麓奥尾根先史聚落の形成についての一考察

(下) および昭和32年に刊行された『尖石』の影響が大きいと思われる〔宮坂英弼 1950, 同1957〕。これら一連の宮坂英弼の論考が発表されて以来, 「埋甕」という語が定着したといっているように思われる。

ところがこの「埋甕」という語が定着し始めると, 地中に埋められている土器はすべて「埋甕」として取り扱われるようになってしまった。宮坂英弼は出入口部に埋められた土器を指して「埋甕」と呼称したのであるが, 次第に竪穴住居の奥壁部や炉辺部に埋設された土器や, 果てには屋外に埋設された土器までが「埋甕」という語でひとくくりにされてしまった。したがって水野正好の「最近では住居の出入口部に設けられた埋甕以外の一住居以外の埋甕, 住居内の他の場所の埋甕までも“埋甕”として理解する傾向が強くなり、概念の拡大が理由なく行われている。」〔水野 1978〕という批判は的を得たものである。しかし, 金子義樹が「埋甕という用語の全廃を提案したい。(中略) それならば, 客観的に“埋設土器”という用語に統一すべきと思う。」〔金子 1984〕という提案には賛成できない。これは百瀬忠幸が「確かにその形態論的用語の不適切さは否めないものの, 学史的・現在の共有性ととも、埋甕という“形態”そのものに, ある一定の歴史的・社会的意味づけを付与しうることから、あえて変更するのはいたずらに問題点を形式化してしまうことになりはしないだろうか。」〔百瀬 1987〕と述べているように, かえって混乱を招いてしまうばかりである(註2)。したがって私は, 「埋甕」(あるいはこれも「出入口部埋甕」と呼称すべきかもしれない。)は出入口部に埋設されたもののみを指し, 他は「奥壁部埋甕」, 「炉辺部埋甕」, 「屋外埋甕」と表現し, そして用途・機能論を考える際には, それぞれ個別に考察していくべきだと思うのである。これらはそれぞれ異なる機能を有していたものと考えられるからである(註3)。

以上のことを踏まえ, 本稿では出入口部に埋設された「埋甕」の用途・機能について考察していきたい。

III 埋甕の用途・機能をめぐる諸説

まず, 埋甕の用途・機能をめぐる諸説をまとめてみよう。私は, 以下の6つの説に大別することができると考えている。

(1) 貯蔵容器説

貯蔵容器説は大場磐雄が昭和2年に南伊豆の見高遺跡の埋甕について「おそらくは食物その他の貯蔵所ではあるまいかとの推定に導かれるものである。」と述べているのがその最初であるまいか〔大場 1927〕。この説は昭和40年に宮坂光昭が改めてとりあげている。宮坂光昭は, 加曽利E式期には埋甕が盛行してくるが, それは恒温・恒湿性をもつ貯蔵庫であるという〔宮坂光昭 1965a〕。そしてその埋甕には, (A) キャリパー形の中形甕を口縁を住居址床面と水平に埋めるものと, (B) 比較的大形キャリパー形土器の, 胴下半部の細くなりだした部分を平に欠いて, それを逆さにして埋めるもの, の2通りの方法が存在することを指摘する。そしてこの2者は貯蔵形態の違いであると論じるのである。つまり, (A) 式の埋甕は「キャリパー形の口の広い開いた埋甕で, 物を入れても取出しが容易である形で, 入れたり出したり

を多くやる、すなわち比較的短期間の貯蔵庫であった」と考えるのに対して、(B) 式の埋甕は「口すばみの底広がり」の形は、取り出すと言うより、入れておくと言う形態が本意である」という〔宮坂光昭 1965 b〕。貯蔵容器説はこの宮坂光昭の論に代表されるだろう。

(2) 小児埋葬容器説

この説を最初に提示したのは後藤守一である。後藤は、昭和8年に船田向遺跡の埋甕について「炉以外の用に供せられた」のものであり、「炉以外の用途としては、直ちに一種の容器として用ゐられた事を考え得べく、又少しく突飛であるが骨壺としての用途をも想像し得られるであろう。」と述べ、「バレストライン地方では乳児の死骸はこれを甕に容れ、家の附近又は家の下に葬ることがある」という民族誌を援用することによって、貯蔵容器の可能性とともに小児・乳児の遺骸を取めたものではないかとの見解を示している〔後藤 1933〕。またかつて貯蔵容器説を唱えた大場磐雄は、平出遺跡の報告書においてロ号住居址にみられる埋甕を「幼児の遺骸を納めたものではあるまいか」と論じ、自説を変えている〔大場 1955〕。

そして昭和40年代に入り、小児埋葬容器説を強力に推し進めたのは渡辺誠であった。渡辺は埋甕を小児甕棺とする根拠として、①入口部床面下に埋葬することが多いという発掘所見・②千葉県殿平賀貝塚遺跡において幼児骨が検出されたこと（註4）・③民俗誌の比較資料、の3点をあげている〔渡辺 1970〕。

この小児埋葬容器説を支持す論者は多く、ほかにも佐藤攻〔佐藤 1971〕、長崎元広〔長崎 1973〕、佐々木藤雄〔佐々木 1981〕、岡本孝之〔岡本 1984〕らが唱えている。

(3) 胎盤収納容器説

埋甕を胎盤を収納する容器であるとの見解は、昭和42年に桐原健によって始めて唱えられた〔桐原 1967〕。桐原は埋甕の特徴を、①加曽利E期の住居址が圧倒的に多い・②廃絶した住居址にも残存している・③入口部に埋められているものが多い・④直立と倒立の2種がある・⑤底部を欠いているものがある・⑥石蓋や自然礫を積みあげたものがある・⑦埋甕用土器には共通性がある。口縁には把手なく平縁でいかにも木製の蓋を被せるに便な形態をとっており、キャリッパー形の形態と合わせて全く典型的な貯蔵用の土器である。文様も力感に欠けている・の7つの項目にまとめている。桐原は、こうした特徴から「これを単なる貯蔵具とみるよりも、何か思惟的な行為のあらわれによるもの」と解釈すべきであり、「ある種の畏怖を伴う儀礼—例えば埋葬儀礼、ならびにそれに準じた儀礼に関する施設の一つではないか」と述べる。そして東南アジアにおける民族誌の知見を援用することにより、埋甕には小児埋葬容器として用いられたもの（石蓋埋甕・自然礫が積みあげられている埋甕・倒立埋甕）のほかに、胎盤を収納する容器として用いられたものも存在することを指摘したのである。

桐原の提示した胎盤収納容器説をさらに追求していったのは木下忠であった。木下は胎盤収納に関する膨大な民俗資料を収集し、「わが国における胎盤埋納の民俗例と埋甕のあり方を比較検討するとき、それを埋める位置からしても、踏めば踏むほどじょうぶに育つという感染呪術の内容からいっても、また、埋甕出土遺跡の分布と民俗分布図との類似からしても妥当性をもつものといわねばならない。」と論じ、胎盤収納容器説を補強しようとした。また住居跡内

のいわゆる「貯蔵穴」なども胎盤を収納するために用いられたものが多かったのではないかという見解も示している〔木下 1970〕。

また戸沢充則もこの胎盤収納説を支持している〔戸沢 1973〕。

(4) 建築供犠容器説

これは水野正好によって唱えられた説である〔水野 1978〕。水野は「埋甕は、住居の新築、建替えにあたり、住居の永遠の堅牢と住まう人々の幸福を希い、寄りくるものを内に入れない目的もあって出入口部に設けられ、その内に供犠された動物や供進された食物などがはじめには収められ、石蓋や板蓋で覆われたものであろう。こうした建築儀礼として成立したのちは、年時の交替時や居住者に変化があった場合には、一旦、石蓋などを除き、再び供犠・供進がなされ収められていくといった形で祭式がとり行われ、やがて廃屋となる日にはその内部を完全に埋めたり、逆に完全に空洞とし石蓋で密閉し貼床やロームでその上面をかくすといった形までとったりし、新たな住居に新しく引きつがれたりするのである。日常の出入の踏みこらしこそ、犠牲をうけ供進をうけた埋甕をめぐる神聖なカーシンボルに力を与える行為として息吹くものと考えられるのである。後世の地鎮、鎮壇にも一面通じている縄文時代の祭式として、埋甕をめぐる祭式は息づいていた」ものであるという興味深い論を提示している。

(5) 信仰関連施設説

八幡一郎、神村透の論考をこの説を代表するものとして理解したい。八幡一郎は住居の内外に、意識的に据えまたは埋められた石蓋をした土器について、「物の貯蔵の必要からとすることもできようし、あるいは一種の棺とも想像されぬことはないが、たいてい黒土が充満するだけで内容物を検し難かったから確実なことはいえない。しかしかく特定地域に特定期間一般的だった所為は、儀式などに付随するものとして信仰に関係付けることも不可能ではなからう。」と、貯蔵容器説や埋葬容器説の可能性とともに、信仰に関わるものであるとの見解を明らかにした〔八幡 1940〕。

神村透もこの立場に近いだろう。神村は埋甕の用途について、「食料貯蔵でないことは断定できる。宗教的な性格が強いと思う。胎盤埋納・幼児埋葬であるとする、住居建造当初から埋甕をするのはどうかと思うし、そういったものを簡単に破壊できるだろうか。全ての住居址にないということは、ある住居址にのみにお産があったのだろうか。そうだとすると埋甕のある家は女性の家となる。」など胎盤収納説や小児埋葬容器説の矛盾点を指摘し、「現在のところ断定できる結論はなく、宗教的意味合いの強いことだけがいえる。」と論じている〔神村 1973〕。八幡や神村の論考は、貯蔵容器説や胎盤収納容器説、小児埋葬容器説を否定し、それ以外の「宗教的・信仰的」な性格を指摘するものであるが、具体的な機能については言及を避けている。このような立場にたつ説を私は信仰関連施設説として理解したいのである。

また胎盤収納容器説を最初に提唱した桐原健は昭和58年には『かような民族学・民俗学知識の援用は、かかる施設の性格究明に際し必要といえる。しかしながら、物的資料が伴わない場合、その考察はあくまでも仮定の域内と留まらざるを得ず、“埋甕”を「縄文時代堅穴住居の出入口部に設けられた思惟的な性格をもつ施設」とのは規定しておく方が現時点における正し

い考察といえよう。』と述べ、自説をこの信仰関連施設説に修正している〔桐原 1983〕。

ところで宮坂英式は貯蔵容器説は否定し、埋甕を「何か呪術的效果を祈願する思惟の所置」と認めなければならないことだと指摘しているが〔宮坂英式 1950〕、それ以上の言及はしていないため八幡や神村の論考と同一に理解することはできないかもしれないが、私はこの説に含めたいと考えている（註5）。

（6）境界祭祀具説

百瀬忠幸は、縄文時代中期後半期が『危機の時代＝境界性の時代』であるとの理解に立ち、埋甕祭祀は出入口部という「境界的領域」に対して行われた儀礼であり、埋甕そのものは出入口部儀礼における象徴＝シンボルの一形態であったことを指摘する。つまり、「イエ」そのものを保護し、安全と繁栄を約束するという目的と役割をその本質的な部分において与えられていた「個別表象」とであると論じるのである〔百瀬 1987〕。広い意味では、これも信仰関連施設説の範疇に含まれるものであろうが、その具体的機能は出入口部に関する境界祭祀であると明示したことは、やはり従来の信仰関連施設説とは同一視することのできない意義をもっているといえよう。したがって私はこれを境界祭祀具説として理解すべきものであると考えたい。また金子義樹や川名広文の論考〔金子 1984・川名 1985〕もこの境界祭祀具説の範疇でとらえることができるのではなかろうか。

IV 胎盤収納容器説・小児埋葬容器説への疑問

以上、用途・機能をめぐる諸説を概観してきた。このうち貯蔵容器説については、否定的な論考が圧倒的であり、私もこの説は成立しがたいと思う。それは宮坂英式の「これが貯蔵を目的とするならば、出入の繁し南側よりむしろ他の位置が選定せらるべき筈である。然るにこの地点が殊に選定せられたのはそこに何らかの強力な理由が存在していたことを語るものである。」という指摘〔宮坂英式 1950〕に尽きるのではあるまいか。出入口部に貯蔵施設を設けてしまうと、通行に、そして日常の生活に支障をきたしてしまうであろう。また渡辺誠が「入口の下に、なおかつその下にたかだかこれくらいの土器に貯蔵したもので生活が成り立つのかどうか」〔渡辺 1980〕と述べていることも見逃せない観点である。

現在、埋甕の用途・機能に関しては胎盤収納容器説および小児埋葬容器説が有力である。なかでも群馬県田篠中原遺跡出土の埋甕についても脂肪酸分析を実施した結果、高等動物の胎盤由来の遺物が検出されたこと〔菊池 1995〕からも、胎盤収納説の有効性が指摘されている。しかしながら、私は胎盤収納説及び小児埋葬容器説が成立するためには

①埋甕は、住居より新しくなくてはならない。

②ひとつの住居址で2つ以上みられる場合が相当数なくてはならない。

という2つの条件をまず考古学的に立証する必要があるのではないかと考えるのである。

まず①について考えてみよう。もし胎盤や小児遺骸が埋甕に収納されたものだと考えるのであれば、埋甕は住居構築よりも後に埋設されたものでなければならないであろう。しかしこれについては水野正好によって否定的見解が示されている。

水野は「後産を埋めるにせよ、死した小児を埋めるにせよ、現実に居住している住居、しかもその出入口に近い場に甕を埋めて収めるかぎり、住居があつてのちに、甕を埋める行為が来ると見るべきであろう。出産なり新生児・小児の死に伴って住居の建替えなり新築が行われるとは考えられないからである。」と理解し、その論拠として神奈川県潮見台遺跡を事例としてとりあげて考察している。水野は、8号・9号住居址では「住居建設時、埋甕が空間構成なり在り方から見て建設計画の中にくみこまれて、炉を設け柱をたて、壁溝を掘るのと同時に埋甕されている事実」が認められ、10号・3号・11号住居址の建替えにあたっては「旧の住居の埋甕を被服し、しかもそれを取りこわすことなく、新しく張り出し部を設けたり、ブリッジ様の構造を設けて埋甕し、同時に炉を移動し、柱の位置を替えて樹てたり、貼床する事実」が確認できることを指摘する。そして、これらの事象は「埋甕は住居の重要な構造要素なのである。こうした前提からすれば、住居の新築、建替え時に住居内の生活に必要な施設として埋甕されるか、新築、建替え時の儀礼なり以後の儀礼の施設として埋甕されるといった場合」が浮び上ってくることを示していると水野は論じているわけである。したがって「胎盤などの後産を収めるとする見解は、住居の建設が新生児の誕生に伴って行われるならば別であるが、住居に居住中に誕生を見た場合では遺構の在り方からして成り立たない見解となるであろう。同様なことは新生児なり小児の死に伴い埋甕が成立するとの見解も、こうした小児などの死が新しい住居の成立なり建替えの契機になるとは考えにくいだけに、遺構の在り方からして成り立たない見解となるであろう。」というのである〔水野 1978〕。これは重要な指摘である。私は後述するが、水野の提唱する建築供犠容器説は成立しがたいものと考えている。しかし「埋甕」という遺構のありかたを考古学的な手法で着実に論じていく水野の考察には高く評価すべきものがある。

次に②の条件について考えてみよう。胎盤収納容器説、小児埋葬容器説のいずれを採用するにしても、ひとつの住居が使用されている年月の間には出産（あるいは乳幼児の死亡）が一回のみであったとは考えにくく、おそらく数回の出産は想定されよう。とするならばひとつの住居址にふたつ以上の埋甕がみられるケースが相当数認められるはずであろう。しかしながら遺構のありかたは果たしてそのような事象を示しているのだろうか。この問題については百瀬忠幸が言及している〔百瀬 1987〕。百瀬は中・南信地方における埋甕を分析し、以下の属性を指摘した。

- ◎出入口部に埋設されている。
- ◎住居の新築ないし増改築の時点で埋設している。
- ◎一住居一埋甕を基本とする。
- ◎住居使用時には基本的に空洞状態であった。
- ◎従来一般にいわれているような必ず跨がなければならないという性格のものとはいえない。
- ◎縄文時代中期後半期という限られた時間の中で生起・展開をみせている。
- ◎住居の出入口部およびその付近に存在する石棒や立石、あるいは、自然石の集石は、埋甕の機能を強化するものであり、それらが単独で存在する場合は埋甕と同等の機能を付与さ

れていたと考えられる。

◎日常的（個別的）な家屋は、原則としてすべて埋甕ないしそれに準ずる施設を有する。

百瀬は一軒の住居跡に複数の埋甕が存在する例が少なからずみられることは認めているが、しかしそれらの「複数埋甕は住居の建て替え行為によるものであり、埋甕は一時期に一個体、すなわち一住居一埋甕の原則と理解できる」ことを論じている。この百瀬の研究に従えば、出入口部埋甕は、ひとつの住居にはひとつの埋甕が基本であることが理解できるのである。つまり、一時期に複数の埋甕をもつ住居跡の事例はほとんど認められないのである。したがって②の条件も成立しがたいのではなかろうか。

私はこうした水野と百瀬の論考を高く評価したい。埋甕の用途・機能をめぐる研究は、桐原健が「しかし、物証のない、かかる施設に具体的にすぎる考察を与えたことは、以後に起った住居内床面下埋設から地面下埋設へとエスカレートした埋甕概念とともに爾後の考究に問題を残した感がしないでもない。」〔桐原 1983〕と指摘するように、ともすれば内容物の有無や民俗誌の援用ばかりに目が傾いていたことは否定できない。埋甕という「遺構」のありかたを本格的に考察したのは神村透が最初であったのではなかろうか〔神村 1973〕。研究史的にみれば、水野や百瀬の論考は神村が提起した視点を継承したものであるとも理解できるだろう。

また、大場磐雄が小児埋葬施設説の根拠とした事例の中には、屋外埋甕として理解すべきものも混同されていることや、渡辺誠が小児埋葬容器説の決定的証拠としてとりあげた千葉県殿平賀貝塚遺跡の「埋甕」の事例は、現在では「墓坑」として理解されるべきものであること、などが明らかになってきている。こうした研究の進展からしても、私は胎盤収納容器説や小児埋葬施設説の有効性には疑問を感じざるをえないのである（註6）。

V 境界祭祀具説の魅力

このように現段階では私は、胎盤収納容器説や小児埋葬容器説には否定的な見解をもっている。一方、水野の建築供犠儀礼容器説では、「なぜ住居の建築時に動物を供犠しなければならなかったのか」、またなぜに「日常の出入の踏みこらし」が必要であったのかがまったく不明確である。それでは埋甕の用途・機能は何か。

埋甕のもつ最大の属性は、住居建築時において出入口部に埋設されていることである。したがってその用途・機能をめぐる考察においてもこの属性をもっとも重視しなければならないであろう。となると私は百瀬の唱えた境界祭祀具説に魅力を感じるのである。百瀬は『埋甕が何らかの儀礼行為の所産と考えられるとき、埋甕は儀礼に伴う目的と意図をもったシンボルと考えることができる。そして、埋甕にそうした儀礼過程における象徴＝シンボルとしての性格を与えるならば、埋甕の概念規定やその属性把握において重要な位置を占めていた、出入口部という特定の間＝空間もまた、象徴次元に属するといえる。』といい、『出入口部という家の内と外とを結ぶ空間で行われた埋甕儀礼は、そうした「どちらにも属さない領域」、すなわち、「境界的領域」に関する儀礼の中にその姿を端的に見ることができよう。』と論じている〔百瀬 1987〕。出入口部に埋設されているという考古学的事象を踏まえるならば、百瀬の論は看過

できない意味をもっているのではなかろうか。私はこの境界祭祀具説に大きな魅力を感じるのである。何よりも埋甕は、出入口部に置かれた境界祭祀具であることが第一義的機能である。

ところで一方では、たしかに埋甕の中には、小児を埋葬したり、胎盤を収納するケースがあったことも考えられるのである。先にとりあげた群馬県田篠中原遺跡の事例は胎盤が収納されたケースが存在したことを示しているのであろう。また石器類などの遺物が、埋甕内から検出されている事例も少なくはない。しかしそれはあくまでも第二義的なものにすぎなかったと考えるべきである。百瀬は「住居使用時には埋甕内は基本的には空洞状態であった」ことを指摘している。また水野も「埋甕された当初は空洞といつか甕内に空間をのこしていても、廃屋を決定したり建替えのある時点では完全に埋まっていたこと」が考えられると述べている（註7）。このような考察は、埋甕は住居廃絶時まで機能しているものであることを教えてくれる。つまり、本来的には埋甕は、境界祭祀具として出入口部に埋設されたものであるが、それは空洞状態であったため、それを利用して、胎盤や小児遺骸を収納したり、石器類が入れられたりする（あるいは偶然に入りこんでしまったケースも相当数あったと思われる。）という副次的な性格も時には認められる場合もあったのであろう。しかしそれはあくまでも第二義的なものにすぎないのであると私は考えている。この点を強く指摘しておきたい。

VI おわりに

以上、埋甕の用途・機能をめぐる研究史を調べていく中で、私なりに疑問に感じた点や考えるところを書き連ねてきた。そうした作業を通じて、私は百瀬忠幸の唱えた境界祭祀具説に大きな魅力を感じたのである。ただし境界祭祀具説にも課題がある。なぜ中期後半期に限り住居の出入口部に境界祭祀具たる埋甕が存在したのかが不明なのである。これについて百瀬は中期後半期を社会の内部構造的な矛盾を抱えた「危機の時代」であることをその理由としてあげているが果たしてその理解が妥当なのかどうかを検討していく必要がある。また百瀬が抽出した埋甕の8つの属性が妥当であるかどうかとも再検討していくべきであろう。したがって現段階ではもっとも有力な仮説であることを指摘するとどめておきたい。

本稿は埋甕の用途・機能に関する私の研究の第一段階の草稿である。こうした研究史の成果を生かして今後は具体的な事例分析を進めていきたいと考えている。大方のご叱正をお願いしたい。

註1 近年も埋甕研究は活発である。なかでも丹羽祐一は、埋甕の時間・空間・土器という構成要素の分析から、「埋甕集団」およびその「構成」の復元に迫り、天竜川水系諸遺跡の集団は、父系父方交又イトコ婚を、その婚姻形式として採用していたことを論じた〔丹羽 1980〕。また、本橋恵美子は、埋甕の動態について分析し、「埋甕にもちいられる土器の動き」と「柄鏡形敷石住居形態の動き」が一致することを指摘する。本橋はこうした埋甕のありかたを敷石住居の発生と展開を考える大きな手掛かりとしようとしているのである〔本橋 1992〕。このように近年の研究では埋甕の用途・機能の問題をひとまず止揚して、新たな段階へすすんでいるように思われる。しかしながら、考古学遺物を正しく理解するためには、やはりその用途・機能をめぐる問題は避けては通れないものであり、その研究意義は依然とし

て高いと考えるものである。

- 註2 ところで藤沢宗平は「竪穴住居の内外から、直立したままないし、倒立状態で意図的に埋められたものを、一般に埋甕と呼称しているが、その前者を仮りに埋甕と呼び、後者を、前者と区別するために伏甕と呼びたい。」といい、逆位で埋められているものは「伏甕」として「埋甕」とは別に取り扱うべきだと述べている〔藤沢 1976・執筆時期は1970〕。神村透も「埋甕といえば正位のをいい、伏甕といえは逆位底部穿孔」のものであると理解し、埋甕と伏甕とははっきり区別しなければならないことを主張している〔神村 1974〕。非常に示唆に富む指摘であるが、私は、正位であるか逆位であるかということよりも、「どの場所に埋設されたか」が重要であると考えている。
- 註3 長崎は、出入口部埋甕には小児埋葬容器説を採用するが、炉辺部埋甕と奥壁部埋甕は、「石柱・石棒などの施設を有する特殊住居に多い」ことや「火熱を受けたシカ・イノシシの獣骨片などが出土している」ことなどから、出入口部埋甕とは異なる用途・機能が与えられていたことを指摘している〔長崎 1973〕。
- 註4 村上俊嗣「松戸市殿平賀貝塚調査報告」『考古学雑誌 25-4』, 1967
- 註5 渡辺誠は、この宮坂英式の「何か呪術的效果を祈願する思惟の処置という所見が「以後の埋葬施設説の根底を規制している」ものであると、これを小児埋葬容器説の先駆けとして位置づけているが、〔渡辺 1968〕私はこの宮坂英式の所見はあくまでも信仰関連施設説として理解すべきものと考えている。
- 註6 胎盤収納容器説にたつ戸沢充則はその論拠のひとつとして、富士見町唐渡宮遺跡から出土した「埋甕」に分娩を表現したと思われる原始絵画の存在をあげているが〔武藤 1969〕、これは屋外埋甕として理解すべきものであると私は考えているので、これをもって論拠とすることはできないのではなかろうか〔戸沢 1973〕。
- 註7 高林重水は宮田村高河原遺跡3号住居址の埋甕の断面観察から、「埋甕内含土は埋甕埋設時に、ある意図のもとに入れられたものではなく、時間の経過にしたがって自然に流入したものであることが考えられたのであり、同時にその流入を許すだけの空間が埋甕内にあったことを意味している。」ことを指摘している〔高林 1971〕。

引用文献

- 大場磐雄 1927「南豆見高石器時代住居址の研究」『日本石器時代住居址』。今回は『大場磐雄著作集 第二巻』, 雄山閣刊に拠った。
- 1955「第三章 二節 主要縄文式竪穴の考察」『平出』, 平出遺跡調査会
- 岡本孝之 1984「縄文人の死産児」『異貌』11号
- 金子義樹 1984「縄文時代における埋甕についての一試論—事例分析を中心に—」『神奈川考古』19号
- 神村 透 1973「南信地方の埋甕について—その学史と事例—」『長野県考古学会誌』15号
- 1974「埋甕と伏甕—そのちがい—」『長野県考古学会誌』19・20号
- 川名広文 1985「柄鏡形住居址の埋甕にみる象徴性」『土曜考古』10号
- 菊池 実 1995「脂肪酸分析と考古学的成果」『考古学ジャーナル』386号
- 木下 忠 1970「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル』42号
- 1973「埋甕といわゆる貯蔵穴」『信濃』25-8号
- 1981『埋甕—古代の出産習俗』, 雄山閣
- 桐原 健 1967「縄文中期に見られる埋甕の性格について」『古代文化』18-3号
- 1983「埋甕」『縄文文化の研究9』, 雄山閣
- 後藤守一 1993「船田向石器時代住居址」『東京府史蹟保存物調査報告書』第10集。今回は『日本考古学選集 第17集』, 築地書館刊に拠った。

- 佐々木藤雄 1981 「縄文時代の通婚圏」『信濃』33-9号
- 佐藤 攻 1971 「茅野和田遺跡東地区の埋甕」『長野県考古学会誌』11号
- 高林重水 1971 「高河原遺跡発見のカッティング所見」『長野県考古学会誌』11号
- 戸沢充則 1973 「埋甕とその背景」『岡谷市誌 上巻』
- 長崎元広 1973 「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のありかたとその意義（上），（下）」『信濃』25-4, 5号
- 藤沢宗平 1976 「伏甕考」『長野県考古学会誌』27号
- 水野正好 1978 「埋甕祭式の復元」『信濃』30-4号
- 宮坂英弼 1950 「八ヶ岳西山麓奥助尾根先史聚落の形成についての一考察（下）」『考古学雑誌』36-4
1957 『尖石』茅野町教育委員会
- 宮坂光昭 1965a 「縄文中期における宗教的遺物の推移」『信濃』17-5号
1965b 「縄文中期勝坂と加曾利E期の差」『古代』44号
- 武藤雄六 1969 「原始絵画のある縄文土器」『考古学ジャーナル』28号
- 百瀬忠幸 1987 「埋甕と境界性について」『長野県埋蔵文化財センター紀要1』
- 八幡一郎 1940 「日本先史人の信仰の問題」『人類学先史学講座』14巻
今回は、『八幡一郎著作集 第五巻』，雄山閣刊に拠った。
- 渡辺 誠 1970 「縄文時代における埋甕風習」『考古学ジャーナル』40号
1968 「埋甕考」『信濃』20-4号
1980 「埋甕研究の背景」『長野県考古学会誌』35号

参考文献

- 猪越公子 1973 「縄文時代の住居址内埋甕について」『下総考古学』5号
- 佐藤 洋 1976 「縄文時代の埋甕習俗」『物質文化』27号
- 田中 信 1982 「埋甕形態論」『土曜考古』6号
- 山本暉久 1977 「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について(一), (二)」『信濃』29-11号, 12号